

## 抄 訳

# チャールズ・ディケンズ ボズのスケッチ集(1)

原 英一 訳



## 解 題

ここに訳出したのはディケンズの最初の作品集として知られる『ボズのスケッチ集』(*Sketches by Boz*, 1836)の一部である。小説家ディケンズが先駆的で有能なジャーナリストでもあったことはよく知られた事実である。『ボズのスケッチ集』はジャーナリストとしての最初の仕事であったが、現代のジャーナリズムとはかなり違う肌合いの文章であることは一読して明らかであろう。ディケンズの小説を読み慣れた者にとっては、後の作品の萌芽をそこに見てとることができる。しかし、一部にフィクションがまじえられているとはいえ、これらの小品は基本的には現実の状況の観察記録である。そこには一九世紀前半のロンドン庶民の生活が精妙に描かれている。それは永遠に失われてしまった世界であるが、この天才的作家の筆によって、不滅のテキストの中に記録されることになった。失われた世界であるがゆえに理解にくい部分も多いが、ディケンズの筆は決して読者を飽きさせることがない。当時の社会の生きた記録として文化的価値はきわめて高い。

この翻訳は某書店から出る予定だったイギリスの思想・文化に関するテキストを集めた叢書のために 1991 年頃に行ったものであるが、叢書の計画が頓挫したために、未発表のままとになっていた。今回、本誌創刊を契機として発表することにしたものである。『ボズのスケッチ集』は、ディケンズの諸作品の中でも特にテキストに問題のあるものであることは、バットとティロットソンの先駆的研究以来よく知られている(John Butt and Kathleen Tillotson, *Dickens at Work*, London: Methuen, 1957)。ここに訳出したものは最もポピュラーな『オックスフォード挿し絵入りディケンズ』(*The Oxford Illustrated Dickens*, London: Oxford UP, 1957)を底本とした。なお、最近スレーター氏の編集によるテキストが出版されている(Michael Slater, ed., *The Dent Uniform Edition of Dickens' Journalism: Sketches by Boz and Other Early Papers*, Columbus: Ohio UP, 1994)。翻訳にあたってはヒルの注釈(T. W. Hill, "Notes on *Sketches by Boz*", *The Dickensian*, Vols. 46, 47, 48)などを参照した。挿し絵はクルックシャンク(George Cruikshank)によるもの。

## 我が教区

## 教区役人、教区の消火ポンプ、学校教師

「教区」——この二つの短い言葉の中には何と途方もない含蓄があるのか。また、どれほど多くの悲痛と悲慘の物語が、破産と破れた希望の物語が、またあまりにもしばしば、救われることのない辛酸とまんまと成功した悪行の物語が連想されることであろう。わずかな稼ぎしかないくせに大きな家族をかかえた貧乏な男が、かろうじて極貧の生活を維持し、その日の糧を得る。彼には目下の自然の欲求を満たすのにやっと足りるくらいのものしかなく、未来のことなど考えられもしない。税金は滞納し、支払期日が過ぎ、また次の支払期日がやってくる。これ以上支払い猶予を求めることはできず、教区に召喚されることになる。財産は差し押さえられ、子どもたちは寒さと飢えで泣き叫び、病気の妻がふせているベッドすらも、病人の下から引きずり出されるのだ。彼に何ができようか。誰に救済を求めればよいのだろうか。民間の慈善団体にか、それとも慈善事業家にずがるのであろうか。いやいやそうではない、教区があるではないか。教区事務所が、教区診療所が、教区医師が、教区官吏たちが、教区役人がいるではないか。すばらしい施設であり、温和で心優しい人々ではないか。妻が死ぬ、すると遺骸は教区の手で葬られる。子どもたちに保護者がいなくなる、すると教区がめんどうをみてくれる。男は最初は仕事を怠け、後では仕事が見つからない、すると教区が救済してくれる。そして貧困に苦しみ酒に溺れたあげく、男がすっかり消耗しきってしまえば、彼は教区の癲狂院で、わけのわからぬことをもぐもぐと喋る、おとなしい狂人となって、世話をしてもらえるのである。

教区役人は、町の行政組織の中で最も重要な者たちの一人、いやおそらく最も重要な一人であろう。確かに彼は教区委員たちほど裕福なわけではなく、教区会書記ほど学識があるわけでもなければ、それらの連中のように思うがままに物事に采配を振るうことができるというわけでもない。しかし、それにもかかわらず、彼の権力は非常に強大であり、自分の職務の威厳を維持しようとご本人が日夜努力しているものだから、決してそれが損なわれることなどないのである。我が教区の教区役人は、なかなかたいしたやつである。教区委員会会合日の夜に会議室の廊下で、彼が救貧法の現状について耳の聞こえない老婆に説明しているのを聞くのはまことに楽しいことであり、また彼が上席教区委員に申し述べることや、その上席教区委員が彼に言うこと、そして「我々」(つまり教区役人と他の皆様方)が実行を決断した事柄などを聞くのもたいへん楽しいものだ。みすばらしい風体の女が会議室に呼び入れられ、六人の子ども持ちの未亡人であるという我が身の上についてその極度の困窮の状況を訴える。「お前の住所はどこであるか」と救貧委員の一人が尋ねる。「旦那様方、わたしどもは、

小ウイリアム王小路三番地のブラウン夫人方の裏の二間続きを借りておりますで、この十五年の間ずっとそこに住んでおりましたで、病院で死んだうちの主人が元気な時分は、えらく働きのええ、精を出す女だとみんなに言われておりましたで」——「なるほど、なるほど」と救貧委員は話を遮り、住所をメモする。「教区役人のシモンズを、明日の朝、お前の話が正しいかどうか確かめに行かせることにしよう。で、もし正しければ、救貧院への入所許可がもらえることになるであろうぞ。——シモンズ、明日の朝一番にこの女のところへ行ってくれんかね」シモンズは、かしこまりましたとお辞儀をし、その女を外へ連れ出す。この女は最初はこの「委員会」（その全委員は、帽子をかぶったままで大きな本の山を前にしてすわっている）を畏れ敬っていたのであるが、その気持ちも、このレース飾りを着けた案内者たる教区役人への尊敬の気持ちの前には、すっかり色あせてしまうのだ。そして、部屋の中で起こったことを彼女が語ると、集まった群衆の、この厳かなる役人に対する尊敬の念は（そんなことがありうるとすればの話だが）さらに一層高まるのである。召喚状の発行申請に関して言うと、シモンズ氏が教区代表として出席するとなれば、全く抵抗のしようがない。彼はロンドン市長の肩書のすべてを暗記しており、一度としてつかえることなく陳述するのであり、ある時などはあえて冗談をまじえたことさえあるという話である。たまたまその場に居あわせたロンドン市長の従僕が、後で親しい友人に話したところによると、その冗談はホブラー氏〔1843年に引退するまでロンドン市長公舎刑事法廷の首席書記官を五十年以上にわたって勤めた人物で、冗談がうまいので有名であったという〕も顔負けというくらいだったそうなる。

あるいはまた、盛装して、三角帽をかぶり、左手には大きな頭飾りのついた杖を、これは見栄のために持ち、右手には、これは実用のための小さなステッキを持った、日曜日の彼の姿を見てみたまえ。なんと横柄な態度で、彼は子供たちを位置につかせることであろうか。そしてまた、教区役人独特のにらみをきかせながら、彼が席についた子供たちを睨め回すときに、この小さな腕白どもがなんと殊勝な態度で彼の方を横目で見ることだろうか。教区委員たちと救貧委員たちがカーテンで仕切られた信徒席に滞りなく着席すると、彼自身は側廊の最前部に、彼専用特別にしつらえられたマホガニー製の張り出し柵のところに席をしめ、祈祷書と子供たちとに半々に注意を向けているのである。聖餐式が丁度始まろうというとき、会衆全員が深い沈黙に入り、式を進める牧師の声だけが聞こえる静けさの中で、突然一ペニー硬貨が、驚くほど明瞭な響きをたてて、側廊の石の床に落ちる音が聞こえる。教区役人の統率ぶりをよくみてみたまえ。思わず浮かべた恐怖の表情は、たちまちのうちに完璧な無関心へと変じてしまい、他の連中はともかくおれにだけはそんな音は聞こえなかったぞとでもいうかのようである。この策略は成功する。その金を落とした犠牲者は、触覚



教区の消火ポンプ

よろしく右足を何度か伸ばして  
みた後で、一、二度そ  
れを拾うためにはっ  
きりと身を屈めよ  
うと試みる。する  
と、教区役人はそ  
っとすべるように  
回って行き、その  
子供の頭が席の上  
にまた現れると、  
前に述べたあのス  
テッキを使って、  
その頭を何度もコ  
ツコツと叩くの  
だ。隣の信徒席に  
いた三人の若者が  
それを見て死ぬほ  
ど面白がり、説教が終  
るまでの間度々激しく  
咳きこむのである。

こうした証拠によって、教

区役人がいかに重要で厳かなる存

在であるか、おわかりいただけ

ことだろう。彼の尊厳は、我々〔ここ

使用される「我々」はジャーナリストが使用する一人称、記者としてのディケンズ  
と同一視しうる〕が観察した限りでは、いかなる場合にも乱されることのない  
種類のものであるのだが、例の特別に有用な機械、教区消火ポンプの出  
動が求められる場合だけは例外である。その時は実際上から下への大騒動  
となるのだ。二人の少年が、足を運べる限り大急ぎで教区役人のもとへ馳  
せ参じ、自分たち自身が目撃した事実に基づいて、近所の煙突が燃えてお  
りますとご注進に及ぶ。消火ポンプが急いで持ち出され、大勢の少年たち  
が集められて、そのポンプにロープで繋がれると、それはがらごとと舗道  
を突進し、教区役人は走る——別に誇張しているのではない、ポンプの傍  
を教区役人が走るのである。やがて一行が、強烈に煤の臭いがただよう、  
とある家に到着すると、教区役人はそのドアを相当の威厳をもって半時間  
もノックする。この手作業に対しては何の応答もないので、ポンプの給水  
栓がひねられる結果、少年たちが歓声をあげる中、ポンプは放水を開始す  
る。消火ポンプは再び救貧院に引き戻され、そして翌日、教区役人は、自  
分の合法的報酬を取り立てるために、その不運な家主を「引っこくる」の

である。我々が本物の火事の現場で教区消火ポンプを見たのは一度きりである。それは威風堂々とやってきた。少なくとも時速三マイル半のスピードでやってきて、水はたっぷりとあり、現場に一番乗りを果たしたのである。ポンッとポンプはうなり、群衆は歓呼し、教区役人は大汗をかいた。しかし、不運なことに、まさに消火にとりかかろうとしたその時に、ポンプに水を注入する方法を誰も知らないということが判明した。そして、十八人の少年と一人の大人が二十分間も懸命に押したのであるが、なんらの効果も生み出すことができなかったのである。

教区役人の次に重要な人物たちというのは、救貧院長と教区付き教師である。だれもが知っている通り、教区会書記というのは、黒い服を着て、先端に二つの大きな印章と鍵の付いたかなりな長さの太い金の時計鎖を身に付けている、背の低いずんぐりした小男である。彼は事務弁護士であり、いつもたいていあわてている。とりわけ、片手に手袋をしわくちやにして握りしめ、もう一方の手に大きな赤い本を抱えて、教区の何かの会議に向かって急いでいるときなどはそうである。教区委員と救貧委員に関してはどうかといえば、これらの連中は完全に除外してしまうことにする。なぜかというと、彼らについて我々が知っていることといえば、彼らが普通まっとうな商人であって、縁が平べったくなりかかっている帽子をかぶっている連中であり、また、教会のどこか目立つ場所に、回廊の増改築とかオルガンの修復といった重要な事業に寄付をしたことが、青地に金文字で刻印されていることがときどきあるというくらいだからである。

救貧院長というのは、われらが教区の場合（もっとも他のどの教区の場合もたいていはそうなのだが）、その生涯のよき部分はすでに過ぎてしまい、人生の残りを何か低級な仕事をしながらずるずると過ごしつつ、現在の境遇を落ちぶれたと感じ、不満を持つのに十分なだけの過去についての思いを、かろうじて残しているという人種ではない。その人物が以前にどのような地位を占め得たのか、納得のゆくほど正確な推測はできない。おそらく、彼は二流の弁護士の事務員であったか、さもなければ、国民学校[1811年に国民協会の貧民の教育促進のために設立した学校]の教師であったかなのだろう。それが何であったにせよ、彼の現在の地位はよりよい方向への変化である。着古した黒の上着とすりきれたピロードのカラーが示しているように、彼の収入は確かに少ない。だが、それでも彼は家賃を払わずに暮らしているし、石炭と蠟燭を、限られた量ではあるが、支給されており、また彼の小王国の中では、ほとんど限らない権威が委ねられているのである。彼は背が高く、痩せた、骨ばった男である。靴と黒の木綿の靴下をシュルトゥ〔体にぴったりした外套の一種〕といっしょにいつも身に付けていて、人が彼の居間の窓の前を通ると、貧民だったらおれの権力の見本を見せてやれたのに、といった表情でにらむのである。彼は小暴君の賞賛すべき見本である。気むずかしく、野卑で、かんしゃく持ちで、目下の者

にはいばりちらし、目上の者にはぺこぺこし、教区役人の影響力と権威を妬んでいるのだ。

この温厚なる官吏とはまさに正反対の人物が我が教区の教師である。彼は、不運の女神に狙い撃ちにされた、例のときどき耳にする連中の一人である。彼がなしたこと、あるいは関わったことで、うまくいったものは何一つとしてないようだ。彼の養父の、ある金持ちの年老いた親戚が、彼に財産を分与するつもりだとかねてから公言していて、たしかに遺言の中では一万ポンドを彼に遺すことにしていたのに、その遺産贈与を追加条項の中で撤回してしまったのだ。こうして、思いがけなくも自活の必要に迫られた彼は、ある役所に就職した。彼より年下の事務員たちは、疫病が蔓延しているかのように、バタバタと死んでいったのに、年長の上司たちときたら、その占めている職が空いて昇進できるのを、彼が今か今かと待っていたにもかかわらず、まるで不死身でもあるかのように、いつまでもいつまでも生き続けた。彼は投機をし、損をした。彼はもう一度投機をし、勝った。ところが、金を得ることはできなかった。彼の才能は偉大であり、性質は穏やかで、寛大で、気前がよかった。友人たちは彼の才能の方で利益を得て、彼の性質の方は悪用した。次々に損失が重なり、不幸の上にまた不幸がおそった。日が経つごとに、彼は絶望的な貧窮の縁へますます追いつめられていき、かつては熱烈な友情を誓った昔の友人たちは、奇妙によそよそしく無関心になっていった。彼には愛する子供たちと、溺愛する妻があった。前者は彼に背を向け、後者は失意のあまり亡くなった。彼は流れのままに流されていった。それがいつも彼の欠点であったし、これほど多くの衝撃に耐えるほど十分な度量は持ち合わせていなかったのだ。自分自身を大切にすることは決してなかったし、貧窮と苦悩の中でも彼を愛してくれたただ一人の者も、もはや存在しなかった。彼が教区の救済を求めたのは、この頃のことであった。幸福だった時代の彼の知り合いの、ある親切な人物が、たまたまその年に教区委員をやっていたものだから、その人物の世話で、現在の職に任命されたのである。

彼は今では老人である。かつては気心の知れた仲間同志として、うつろな友情で彼を取り巻いていた多くの者たちのうち、ある者は死に、ある者は彼同様に落ちぶれ、ある者は出世したが、その全員が彼のことを忘れ去っていた。時の流れと不運のおかげで彼の過去の記憶は薄れ、現在の状態は習性となってしまうている。柔和で不平も言わず、職務の遂行には熱心であったので、彼は通常の期間よりもはるかに長い間その職にあることを許されてきた。そして、老衰のために無能となるか、死によって解き放たれるまで、そこに必ずとどまり続けるだろう。この銀髪の老人が、学校の休み時間に狭い中庭を弱々しい足取りで行ったり来たりしているのを見れば、彼の昔の友人たちのなかで一番親しかった者ですらも、この救貧院教師の中にかつての陽気で幸福だった友の姿を認めることは、本当に困難なことだろう。

### 牧師補、老婦人、退役海軍大佐

我々が前章を我が教区の教区役人から始めたのは、彼の役職の重要性和威厳とを深く理解しているからであった。我々はこの章を牧師から始めることにしよう。何しろ我々の牧師補はたいへん魅力的な外見と人を魅了する物腰を備えた若い紳士であるものだから、彼が教区に初めて姿を現して以来一ヶ月も経たないうちに、住民の中の若いご婦人たちのうち半数は信仰心のためにふさぎこみ、後の半数は恋の病でやつれてしまうという有様となった。日曜日にこれほど多くの若いご婦人たちが教会に姿を見せたことなどかつてないことであった。そしてまた、側廊にあるトムキンスの記念碑〔トーマス・トムキンス(1637?—1675)、イギリス国教会の聖職者〕の上の小さな丸い天使たちの顔も、彼女たち全員が示しているような敬虔さを見たことは一度もなかったのである。彼は、初めてやってきて教区民を驚かせたとき、およそ二十五歳くらいであった。彼は、ノルマン様式のアーチ形に髪を額の中央で分けており、左手の薬指に最高級のブリリアントカットのダイヤモンドをはめており(それを彼は祈りを朗唱するときいつも左の頬にあてるのであった)、異常に厳粛で深く陰鬱な声を持っていた。この我々の新しい牧師補のところへの思慮深い母親たちの訪問は数限りなく、また彼が受けた招待も数限りなかったが、彼のために公正に言うておくが、それを彼は喜んで受けたのである。説教壇での彼の態度が好意的な印象を生み出したとすれば、私的な集まりに彼が姿を見せることによってその印象は十倍になるのであった。説教壇や聖書台のすぐ近くの信徒席の価値が高まり、中央通路の座席はプレミア付きとなった。回廊の前列では一インチの余裕を得ることすらいかにしても不可能であった。そして、ある人々の主張によると、教区委員の席のすぐ後ろに目立たない家族席を持っているブラウン家の三姉妹が、ある日曜日に、聖餐台の傍の無料席で、牧師補が聖具室へ行くのを実際に待ち伏せているところを発見されたそうである。彼は即興の説教をやり始め、いかめしい父親たちさえもその感化を受け始めた。ある冬の夜などは、彼は十二時半過ぎにベッドから起き出して、洗濯女の子供に茶こぼしを使って略式洗礼を執り行なってやったので、教区民たちは限りなく感謝したのである。教区委員たちさえも気前がよくなり、雨天の時に葬儀を行うために、この新牧師補が自分で注文した車付きの番小屋の費用は教区が支出する、と主張したのであった。彼は一度に四人の子供を出産した貧しい女のために三パイントのオートミール粥と四分の一ポンドのお茶を送ってやった。これには教区全体が魅了された。彼は彼女のために募金活動を行い、その女は金持ちになった。彼は「山羊と長靴」亭での反奴隷制集会で一時間と二十五分の間演説を行い、熱狂は最高潮に達した。牧師補が教区に対して行った貴重なる貢献への敬

意の印として、銘板を贈呈するという計画が開始された。賛同者のリストはたちまちいっぱいになった。争点は、誰が寄付を免れるかではなく、誰が真っ先に申し込むかということであった。豪華な銀製のインクスタンドが作成され、適切な銘文が刻まれた。牧師補は前述の「山羊と長靴」亭での公式朝食会に招待された。例のインクスタンドは、元教区委員のガビンズ氏による手際のよい演説を伴って贈呈され、それに対する牧師補の返礼の挨拶の言葉には、出席者全員が眼に涙をにじませ、給仕たちすら感涙にむせぶほどであった。

誰からも賞賛されるこの人物の人気は、この頃までに頂点を極めたものと、人は思うだろう。ところがそうではなかったのだ。牧師は咳をし始めた。連祷と使徒書簡との間に四回の咳の発作、それに午後のお祈りの間に五回。これではっきりした、牧師補は肺病病みだったのだ。なんて興味深く物悲しいことであろう。若いご婦人方は以前も精力的であったけれど、現在の彼女らの同情と憂慮ときたら際限がなかった。あの牧師補のようなお方が、あんな素敵な、あんなにも非の打ちどころなく愛らしいお方が、肺病病みでいらっしゃるなんて！あんまりだわ。黒スグリのジャム、咳止め飴、伸縮自在のチョッキ、寒さ防ぎの胸当て、暖かい靴下などの匿名のプレゼントが牧師補の元に雨のように降り注ぎ、ついに彼はまるで今にも北極探検に赴こうとしているかのように、冬用の衣服を完全に整えてしまったのであった。彼の健康状態についての口伝えの報告が、一日に五回も六回も教区中に流布された。こうして、牧師補の人気はまさに絶頂に達したのである。

この頃に教区の雰囲気にある変化が生じたのであった。過去十二年間、我々の支聖堂で祭司を勤めてきた、たいへん物静かで立派な、居眠りばかりしていた老紳士が、ある晴れた朝に、自分の意志を何ら予告することもなく、死んでしまったのである。この事件が第一の対抗的センセーションを引き起こし、そして彼の後任の到着が第二の対抗的評判を惹起したのであった。彼は青白く、痩せた死人のような男で、大きな黒い眼と長いほつれた黒髪を持っていた。彼の衣服は極端にだらしがなく、物腰はぎこちなく、教義は人の度胆を抜くものであった。手短かに言えば、彼はあらゆる点で牧師補とは正反対の人物だったのである。我々の女性教区民が大挙して彼の説教を聞きに集まった。最初は、彼がとっても風変わりだったからであり、次には彼の顔がとっても表情豊かであるからであり、それから彼はとっても説教がうまいからであり、そしてついには、彼には結局のところ、何ともいわく言い難い何かがあると彼女たちが本気で思いこんだからであった。牧師補の方とは言えば——そりゃあの方ではあの方でたいへん申し分ないわ、でもねえ、何て言いますかしら、つまりそのお——手短かに言えば、牧師補は目新しい存在ではないけれど、もう一人の牧師がそうであることは否定しようがなかったのである。世論というものが気まぐれであることは諺にもある通りで、会衆は一人ずつ移動していった。牧師



補は顔が真っ赤になるまで咳をしてみせたが、無駄であった。彼は苦しうに呼吸してみせた——それとても同情を喚起する効果はやはりないのであった。信徒席は、教区教会のどの場所でも再び取れるようになり、支聖堂の方は、毎日曜日に窒息するほど混雑するので、拡張されることになっている。

我々の教区民の中で、最もよく知られ最も尊敬されているのは一人の老婦人で、この人は我々の名前が洗礼リストに登録されるずっと以前から我々の教区に住んでいるのである。我々の教区は郊外にあって、この老婦人はその中でも最も風通しがよくて快適な場所にある小ぎれいな家並みに住んでいる。その家は彼女自身のものであり、十年前よりは少し年老いたように見えるこの老婦人自身を除けば、その家も、そしてその周囲のすべても、彼女の夫が生きていた頃と全く変わらないたたずまいなのである。通常この老婦人が座っている小さな表の居間は、静かな小ぎれいさのまさに見本である。カーベットは茶色のホランドで覆われていて、鏡と額縁は黄色のモスリンに注意深く包まれている。テーブルカバーは、テーブルの折りたたみ自在板にテレピン油を塗り、蜜蝋で磨きをかける時以外は決して外されることはない。この作業は二日に一度九時半に定期的に開始されるのであり、装飾用の小物は正確に同じやり方で並べられるのである。これら装飾品の大部分は、同じ棟に両親が住んでいる幼い少女たちからのプレゼントである。しかし、それらのうちのいくつか、たとえば、二個の古風な時計（それらは、一つがいつも十五分遅れていて、もう一つはいつも十五分進んでいるので、決して同じ時間にはならないのであるが）、シャーロット王女とレオポルド王子が〔1790—1865、英国のヴィクトリア女王の伯父に当たる人物で、後にベルギー国王レオポルド一世（在位 1831—1865。イングランド王女シャーロットと結婚したが王女は翌年（1817）に逝去。レオポルドは当時英国に住み社交界の中心人物であった〕、ドルリーレーン劇場のロイヤルボックスにお見えになったときの小さな絵、それから同種の他の品々は、長年にわたってこの老婦人が所有してきたものであった。ここで老婦人は眼鏡をかけて忙しく針仕事をしながら座っている。夏には窓の近くに座っていて、人が階段を上がってくるのを見かけて、たまたまその人がお気に入りの人であった場合には、早足で出ていき、ノックする前にドアを開けてくれるのである。そして、暑い中を歩いてきたのだからきつとお疲れのことでしょう、と言って、おしゃべりという仕事の前にまずシェリーを二杯飲むようにとすすめてくれるのである。もし夕方訪問すると、彼女は元気ではあるが、いつもよりはずっと厳粛な様子で、自分の前のテーブルに聖書を広げており、女主人と同じくらい小ぎれいで几帳面な女中の「セアラ」が、その中の二、三章を、居間の中で声を出して読むのである。

この老婦人はほとんど客に会わないのであるが、前に述べた少女たちだけは例外で、その一人一人が彼女と定期的にお茶を飲む日がいつもきちん

と決っていて、その子はその日を人生最高の楽しみとして待ち望んでいるのである。彼女は両側の一軒おいて隣りより先にはめったに出かけることはない。そして、彼女がここでお茶を飲むときには、「奥様」がドアの前で待たなければならなくなつて風邪をひくようなことがあつてはならじと、セアラがまず走り出て行って二度ノックするのである。彼女はこうしたちょっとしたご招待に対して実にこまめに返礼をするのであり、彼女が何某夫妻に対して別の何某夫妻にお会い頂きたいと求めるようなことがあると、セアラと彼女は紅茶沸かしと最上の陶器の紅茶セット、それにポーブジョーン〔トランプのゲームの一種〕用のボードのほこりを拭い、そして、客たちは客間で物々しく迎えられるのである。彼女にはわずかな親類しかおらず、しかも彼らは国中の異なった場所に散らばっているので、めったに会うこともない。彼女にはインドにいる息子がおり、その息子のことをいつも立派でハンサムな男だと人に話すのである。サイドボードの上にかけてある彼の亡き父親の肖像にととてもよく似ているんですよ、でもねえ、と老婦人は悲しげに頭を振って付け加えて、あの子は昔から私にとっては最大の試練の一つであつたんですよ、実際一度などほとんど胸の張り裂けるような思いをさせられましたよ、けれども、神様の思ひ召しで、何とかそれにも打ち勝つことができましたの、そんなわけですから、この話は二度と出さないようお願いいたしますよ。彼女には多数の年金受給者がついていて、日曜日に彼女が市場から帰ってくると、自分たちの毎週の支給金を待ち受けている年老いた男女がいつも廊下に集まっているのである。どんな慈善の募金活動でも彼女の名前が常にリストの先頭にあり、冬期石炭・スープ配給協会への寄付金の中では彼女のものがいつも最も気前のよいものである。彼女は我々の教区教会にオルガンを設置するために二十ポンドを寄付し、子供たちがそれに合わせて歌った最初の日曜日には感動のあまり信徒席案内人の手で外に運び出されなければならなかったほどである。日曜日に彼女が教会に入つてゆくと、それを合図のように側廊でちょっとした騒ぎが起こつて、貧しい人々が皆立ち上がり、信徒席案内人がこの老婦人をいつもの席へ案内して、敬意をこめて身を屈めてお辞儀をし、ドアを閉めるまでの間、頭を下げたりお辞儀をしたりしているのである。そして、その同じ儀式が彼女が教会を去るときにも繰り返される。その時彼女は一軒おいて隣りの家族と一緒に歩いて帰るのだが、いつもまずいちばん下の少年にあの聖書の文句がどこにあったかを尋ねることで会話を始め、ずっとその日の説教のことを話しながら歩くのである。

海岸のどこか閑静な土地への年に一度の旅行という変化を除けば、このようにしてこの老婦人の生活は過ぎてゆく。今ではもう長年にわたって、それは同じ変化のない、慈善に満ちた道をたどつてきており、決して遠くない時期に最後の終点に達するに違いない。彼女は、その終りの時を、穏やかに、また不安もなく待ち望んでいる。彼女にはあらゆる希望があり、

恐れるべきものは何もないのである。

この老婦人の隣人の一人に、彼女とはまるで違った人物だが、我々の教区で非常に目立った存在となった男がいる。彼は退役した老海軍士官で、そのぶっきらぼうで形式ばらない振舞いは、老婦人の家庭経済を少なからず混乱させるのである。まず第一に、彼は誰が何と言おうと前庭で葉巻を吸うのであり、葉巻と一緒に何か飲みたい時には——それも決して珍しいことではない——彼は散歩用のステッキで老婦人のノッカーを持ち上げて、テーブル・エールを一杯、それも柵越しに渡してよこせと要求するのである。このずうずうしい行いに加えて、彼はちょっとした何でも屋、あるいは彼自身の言葉を借りれば、「正真正銘のロビンソン・クルーソー」であって、彼にとっての何よりの楽しみは、この老婦人の財産を使って実験をすることなのである。ある朝彼は早起きして、彼女の前庭の花壇全部に、十分に育ったマリゴールドの根を三本か四本ずつ植えてしまった。老婦人は起きて窓の外を見たところ、夜の間に生じた何か怪奇な噴出物ではないかと実際思い込んで、とてつもなく仰天したのであった。また別な時には彼は機械の掃除をするからと言って、表の踊り場にある八日巻き時計をばらばらに分解し、何か得体の知れない方法によって再び組み立てたのであるが、そのやり方があまりに奇抜なものだったので、それ以来長針が短針をつまづかせてばかりいるのである。それから彼は蚕の繁殖を始め、その蚕を小さな紙箱に入れて日に二、三回強引に老婦人に見せにやってきては、たいていその度に一匹か二匹虫を落してゆくのであった。その結果、ある朝非常に肥えた蚕が一匹、二階へ行こうとしているところを発見されるに至ったのである。おそらくこの蚕は友人たちの消息を尋ねに行くつもりであったのだろう。何しろ、更に調査を進めてみたところ、彼の仲間が何匹か家のありとあらゆる部屋に入り込んでしまっていたらしかったのだから。老婦人は絶望して海岸へ行ってしまったのだが、その留守の間に、彼は彼女の真鍮の標札を強水で磨こうとして、そこから彼女の名前を完全に消し去ってしまったのであった。

しかし、こうしたことすべても、公的生活の面での彼の煽動的振舞いに比べれば取るに足らないものである。彼は教区会には毎回欠かさず出席し、常に教区当局に反対意見を唱え、教区委員の不品行を非難攻撃し、教区会書記を相手に法律上の問題で論争をふっかけ、収税吏には、もうこれ以上はごめんだと音を上げるほど何度も集金に通わせたあげく、わざと送金してやり、毎日曜日には説教に難癖をつけ、オルガン奏者には、恥を知れ、と言い、賛美歌をうまく歌えることにかけては、男だろうが女だろうが、いや、子供たちを全部ひっくるめても自分にかなう者はいない、いくらでもかけてやるぞ、とうそぶく。つまり、手短かに言えば、きわめて荒々しく騒々しい身の処し方をしていたのである。中でも最悪なのは、あの老婦人を大いに尊敬しているものだから、彼女を何とかして自分の思想に転向さ

せようと望み、それゆえ自分の新聞を手を持って彼女の小さな居間に入ってきて来ては、何時間も過激な政治思想をまくしたてることである。彼は結局、根は思いやりのある率直な人物である。だから、彼が時々老婦人を少しばかり困らせることはあっても、彼らは大体においてきわめて折り合いがよく、彼が自分の手練のわざを見せる度に、それがすっかり終わってしまった後ならば、他のすべての人と同様に彼女も大笑いするのである。

### 教区役人選挙

我が教区で最近大きな行事があった。この上なく興味をかきたてられる競争が丁度終わったところである。教区全体を揺り動かす一大事件が起こったのだ。その事件の後には輝かしい勝利があり、それは全国民が、いや少なくとも全教区民が（どちらでも同じことなのだが）長いこと記憶にとどめるであろう。選挙があったのだ。教区役人選挙が行なわれたのである。古い教区役人体制の支持者たちはその堅塁を撃ち破られ、偉大な、新たな教区役人思想の信奉者たちは、誇るべき勝利を達成したのだ。

我が教区は、他のすべての教区と同様に、独立した一つの小世界であるのだが、長い間二つの党派に分裂していて、その相互の敵愾心は、しばしの間眠ってはいても、再燃する機会がありさえすれば、以前と少しも変わらない激しさでほとばしり出るのである。巡視税、灯火税、舗装税、下水税、教会税、救貧税、とにかくありとあらゆる税が、とっかえひっかえこの偉大な闘争の争点となったのである。そして、支持者獲得競争の断固とした熾烈さときたら、とても信じられないくらいなのだ。

与党の指導者、すなわち教区委員たちの堅固なる支持者であり、救貧委員たちのゆるぎない支持者である男というのは、我々と同じ棟続きの町内に住む老紳士である。彼はここで半ダースほどの家の家主であり、自分の財産全部が一望に見渡せるように、いつも通りの反対側を歩くのである。彼は背が高く、やせて骨ばった男で、人を問いたさうな鼻と、小さくて落ち着きがなく上を向いた眼を持っていて、どうやらそれらは他人の事を覗き見するという目的のためだけに彼に備わっているものらしい。彼は我々の教区の問題の重要性を深く肝に銘じており、教区民代表会に集まった教区民に演説する自分の話しぶりを少なからず誇りにしているのである。彼の物の見方は広いというよりはむしろ限定されたものであり、思想はといえば、寛容というよりは狭隘である。彼は大声で報道の自由への支持を弁じ、新聞に課せられた印紙税の撤回を支持しているということだが、それというのも、今や公衆を独占している日刊紙は、教区民代表会での発言を逐一記事にしていらないからというのである。自分は決して利己的だと思われたくはない、と彼は言う、しかし、たとえば寺男の報酬とその職務内容に関してのわし自身が行なったあの有名な演説などのように、大

衆を大いに感化し、ためになる演説というものが確かにあるものだということは言うっておかねばならん、のだそうだ。

公的生活の面での彼の大敵は、すでに読者諸氏にご紹介済みの、あの老退役海軍大佐である。この大佐は、だれかれの区別なく、とにかく既成の権威に対しては断固たる敵対者であり、しかも、我々のもう一方の友とはいえば、権威を持つ個々の人物の美点にはやはり何の考慮も払わないまま、そのゆるぎない支持者であるものだから、この両者の衝突の機会が少なくもなく、まれでもないということは容易に想像されるだろう。彼らは、石炭のかわりにお湯で教会の暖房をするという動議について、一四回も教区民集会での採決を要求し、自由と出費、放蕩と熱湯についてそれぞれ熱弁をふるい、教区民全体を興奮状態に巻き込んだのである。それから、大佐が救貧院監査委員会の一員であり、仇敵の方が救貧委員であったときに、大佐は、救貧院の運営に関して、ある明確で個別的な非難を公言し、自分は現在の救貧院当局者に対して全く信頼を持ってないとあからさまに表明したうえ、「貧民収容者用スープの調理指示書及びすべての関係書類の写し」の提出を要求した。救貧委員はこれに対してあくまでも抵抗した。彼は、前例を盾に論陣を張ると同時に、従来の慣行に訴え、書類の提出を拒否した。その根拠というのは、もし救貧院長と料理人との間で取り交わされた全く私的な性質の書類が、教区民会の一個人の動議によって、このような形で明るみに出されれば、公共事業が損害をこうむることになるからというのである。この動議は二票差で否決された。すると、敗北に甘んじることを決めているさぎよしとしない大佐は、この問題全体を審査するための調査委員会の設置を提案した。事は重大になってきた。この問題は会議や教区民会で何度も何度も論議され、演説が行なわれ、攻撃と否認の応酬があり、個人的な挑戦の火花が散り、釈明が繰り返され、それはもう途方もない興奮のるつぽであった。そのあげく、ようやくこの問題に結論が出ようとしていた矢先、教区民会は、自分たちがどういうわけか形式上の問題に巻き込まれてしまっていて、そこから体よく逃れることが不可能であるという事実が気がついたのである。そんなわけで動議は引込まれたのだが、誰もがこの上なく偉そうな素振りをし、この顛末のすべてがまことに賞賛すべきことであると大いに満足しているようであった。

我が教区の現状は一、二週間前からこのようなものであったが、その時教区役人のシモンズ氏がぼっくりと死んだのである。この惜しむべき人物は、逝去の一日か二日前に、泥酔したある老婦人を救貧院の拘束室に運ぶために過度の労働をしてしまったのであった。こうして頭に血が上っていた上に、教区消火ポンプの指揮者という役目を遂行中に、うかつにも火の方ではなく自分の体の上に水をかけるという不手際を演じた結果、ひどい風邪をひいてしまい、老齢のために弱っていた彼の肉体は耐えきれなかったのである。そして、シモンズ氏が亡くなったので後はよろしくという知

らせが、ある晩救貧委員会の席にもたらされたのであった。

この亡くなった役人が息を引き取るか引き取らないかのうちに、その空席となった役職を求める競争者たちがどっと押し寄せた。彼らは誰もが、自分の家族がいかに人数が多く、大きなものであるかということを大衆の指示を得る頼みの綱としていたのである。まるで教区役人の職というのは、もともと人類の繁栄のために創設されたものででもあるかのようであった。「教区役人にはバングをお選び下さい、小さい子供が五人います！」——「ホプキンズをぜひ教区役人をお願いします、小さい子供が七人いますよ！」——「教区役人にはティムキンズをよろしく！九人もの子持ちだよ！」白地に大きな黒い字で書かれたこういったポスターが、壁という壁に大量に貼られ、主だった店のウィンドウに掲げられた。ティムキンズの勝利はまず確実であろうと思われた。家族持ちの母親たちの何人かが支持票を投ずることを半ば保証していたし、九人の幼子たちが決定打になるはずであった。ところがそのとき、さらに一層賞賛すべき候補者の登場を告げる別のポスターが出現したのである。「スプラギンスをぜひ教区役人に。十人の幼子（しかもそのうち二人は双子です）と一人の妻を抱えているのです!!!」これには逆らいようがなかった。十人の幼子というだけで、たとえ双子がいなかったとしても、抗しがたい魅力であったろうが、この自然の賜物についての感動的なかっこ付きの部分と、スプラギンス夫人についての一層感動的な言及は、勝利を不動のものとするに違いない。スプラギンスはたちまち寵児となり、また奥方が支持票を集め歩くその姿（それはスプラギンス家にさらにもう一人の家族が加わるのもそう遠からずであるという期待を大いに高めるものであった）は、一般大衆の支持をいやがうえにも高めることになった。他の候補者たちは、バング一人を除いて、絶望して降りてしまった。投票日が定められ、選挙運動は両陣営ともに活発に、執拗に展開されていった。

教区民会の会員たちにしても、この行事につきものの伝染性の興奮状態をまぬがれるはずはなかった。教区の女性住民の大多数は、ただちにスプラギンス支持を打ち出した。そして、例の救貧委員も同じ陣営に立ったのだが、その根拠というのは、これまでにその職に選出されてきたのは常に大家族を抱えた男であったし、その他の点に関しては、スプラギンスが二人の候補者中最もふさわしからぬ人物であることは認めざるをえないとしても、それでもなお、これが古くからの慣習であるのであって、その古くからの慣習が破られるべき理由は何もないから、というものであった。大佐にとってはこれだけで十分であった。彼はすぐさまバングの陣営に組み、あらゆる方面で彼のために選挙運動を展開するとともに、スプラギンスに関する諷刺文を書いて、肉屋に手を回し、店頭をよく目立つ骨付き肉の上に串で刺しておかせた。また、スプラギンス一党を口をきわめて非難して、例の隣人の老婦人を心臓が高鳴るほど震え上がらせた。揚げ句のは

てに、内といわず外といわず、前後左右、四方八方に飛び回るものだから、教区の醒めた住人たちは皆、彼が選挙が始まるずっと前に脳炎で死んでしまうにちがいない、と思うようになったほどであった。

選挙当日が到来した。これはもはや個人の闘争ではなく、与野党の党派抗争であった。争点は、救貧委員の泣く子も黙る影響力やら教区委員の権勢やら教区会書記の暗黒の専制やらによって、教区役人選挙を一つの形式にしてしまうこと、つまり形骸化してしまうことが許されてよいのか、彼らが教区会によって選出された教区役人を教区民に押し付け、彼らの命令を実行させ、彼らの見解を宣伝させることが許されるべきなのか、それとも、教区民たちが自らの疑うべくもない権利を勇敢に行使して、自分たち自身の手で独立の教区役人を選出すべきなのか、というものであった。

候補者指名は聖具室で行なわれることが決まっていたのだが、熱心な観衆があまりに大勢集まったので、会場を教会へ移動する必要があると判断したので、そこに場所を移して、この儀式はそれにふさわしい厳粛さをもって開始されたのであった。スプラギンスを後に従えた教区委員、救貧委員、前教区委員、前救貧委員といった人々の登場は、全員の関心を引き起こした。スプラギンスは色あせた黒い服を着た、長く青白い顔の小男であったが、その表情には、家族が多すぎるためか不安で落ち着きがないためなのかは分からないが、心労と疲労の色が表れていた。彼の対立候補は、大佐のお古である、金ピカのボタンのついた青い上着を着て現れた。それに白いズボンと「短長靴」という呼び名でよく知られている種類の靴をはいていた。バングの率直な表情には落ち着きがあり、その自信に満ちた態度には道徳的威厳が備わっており、「皆様にもこの気持ちを分けてさしあげたいものだ」といった目つきをしており、その目で見られると彼の支持者たちは奮い立ち、敵陣営の者たちは明らかに意気消沈してしまうのだった。

前教区委員が立ち上がって、トーマス・スプラギンスを教区役人に推挙する演説を始めた。「この人物とは長い知り合いである。私はもう何年もの間彼のことはじっと観察していたのである。この何ヵ月間は二重の注意力をもって彼を見つめていたのだ。（ここで一人の教区民が、それはよくよく見直したって言った方がいいんじゃないのか、と野次を飛ばしたが、この意見は「規則違反！」という大声の合唱の中に吞込まれてしまった。）繰り返して言うが、私は何年もの間彼に目をつけていたのであり、あえて言わせてもらうが、この人物ほど品行方正で、礼儀正しく、落ち着きがあり、物静かで、整然とした精神の持ち主であるような人間には、一度も出会ったためしがないくらいだ。これほどの大家族を抱えた男というのは、私は他に知らないのである（歓声）。この教区には信頼できる人間が必要なのである（スプラギンス陣営から「いいぞ！」の声、バング陣営からは皮肉な野次がそれに応ずる）。そのような人物を私はいま推薦するのであ

る(「だめだ」,「賛成」)。私は個人攻撃をするつもりはない(前教区委員は、偉大な弁舌家を使う手である、あの名高い否定の様式を用いながら続けた)。かつては国王陛下の軍隊で高い地位にあったある紳士に言及するつもりはない。この紳士は全然紳士などではない、と言いはしない。この男は男にあらずと主張することもしない。この人物は、この件に関してのみならず、以前のありとあらゆる機会に、はなはだしい狼藉を働いたなどと言いはしない。この人物が、混乱と無秩序を行く先々にもたらしめているあの不満分子、不穏分子の仲間であると言うつもりもない。この人物の胸中には妬みと憎しみ、悪意やありとあらゆる無慈悲さがひそんでいるのだ、などと言うつもりはないのだ。とんでもない。私は万事が快適で楽しいものであってほしいと願っており、だからこそこの人物に関して私が言いたいことは——何もないのである(歓呼)。

大佐の方も同様な議会式弁論術で答えた。「私は、今行なわれた演説に呆れ返ったなどと言うつもりはない。うんざりしたなどと言いはしない(歓呼)。自分に向かって投げ付けられた悪口雑言に反駁するつもりもない(さらなる歓呼)。私は、かつて在職し今は幸福にも退職した人物、救貧院を運営し、貧民を搾取し、ビールに混ぜものをし、パンを生焼けにし、肉に骨を入れ、労働は強化し、スープを薄めた人物について言及するつもりはないのである(大喝采)。そのような連中が何に値するか尋ねはしない(「一日食事抜きにすれば、分かるだろうさ!」と一声)。一般大衆の怒りがひとたび爆発すれば、彼らは自らの存在によって汚したこの教区から追放されるであろうと、言いはしない(「追放しちまえ!」)。先ほど推薦された不幸な人物、すなわち教区民会の手先としてではなく、教区役人として推挙されたあの人物に関しては何も言うまい。かの人物の家族に言及するつもりはないし、九人の子どもに双子に細君というのは、貧民が見習うにしてはきわめて悪い手本だなどとは言わない(大声の歓呼)。私は、バング氏の資格に関して詳細に言及することはしないつもりだ。なにしろ本人が目の前に立っているし、この場にいなかったら彼について言いたいと思うことも、本人のいるところと言うつもりはない。(ここでバング氏は、帽子のかげに隠れて近くの友人に信号を送り、左目をつむり、右の親指を鼻先にあててみせた。)バングには五人の子どものもしかいないではないかという反対意見があった(「いいぞ、いいぞ!」と敵陣からの声)。なるほど、立法府が、教区役人の職に関して正確にどれだけの扶養家族数を条件としているのか、私は寡聞にして知らないのであるが、しかし、大家族持ちであることが大きな要件であるということを認めたくうえで、諸君には是非とも、何の間違いもあるはずのない事実とデータを直視し、比較検討していただくことをお願いしたいのだ。バングは三十五歳である。スプラギンスについては、ありとあらゆる敬意を込めて申し上げたいのであるが、氏は五十歳である。バング氏が后者の年齢に達したときに、現在スプラギ



ンスが自分の家族と称しているものさえも質量ともにしのぐような家族が、彼を取り巻いているということがいかにもありうべきことではありませんか、いやきわめて可能性の高いことではないのでありましょうか（耳を聳するほどの歓呼の声、そしてたくさんのハンカチが振られる）」大喝采の中、大佐は、警鐘を打ち鳴らせ、投票に急げ、圧制から自らを解放せよ、さもなくば永遠に奴隷の身分に甘んぜよ、と教区民に呼びかけて演説をしめくくった。



翌日投票が開始されたが、  
我が教区の大騒ぎぶりときたら、

教区役人選挙

我々があの名高い奴隷制反対誓願を起草し、それがあまりに重要なものであったものだから、地区選出議員の動議に基づく議会下院の印刷命令が発せられたとき以来のものであった。大佐は、バング支持者たちのために二台の二頭立て馬車と辻馬車を一台調達した。辻馬車は酔っぱらった有権者用であり、二頭立て馬車二台は老婦人連用であったが、この老婦人たちの大部分は、大佐がやたらにせき立てるあまり、どさくさの中で自分たちが何をしているのか十分明瞭に理解することもないまま、投票所へ運ばれ、そしてまた家へ連れ帰られてしまったのである。対立候補側はこういった準備を完全に怠っていた。その結果どういうことになったかということ、（その日はたいへん暑かったものだから）教会までのんびりと歩いていき、スプラギンスに投票しようとしていた多数のご婦人方が、馬車の中にたくみに誘い込まれ、バングに投票してしまったのである。大佐の応援演説もまた、かなりの影響力があったのだが、教区民会が圧力をかけようと試みたためにさらに大きな効果が生じるようになった。教区会書記が、独占的取引を

するぞ、という脅迫を行なったことがまぎれもなく立証されたのである。これは冷酷で放埒な悪行だ。どうやらこの不埒者は、教区に小さな家を借りて初期の定住者たちと共に住んでいたある老婦人から、毎週六ペンス分のマフィンを購入するという習慣を持っていたらしい。この婦人が最近いつもの曜日に訪問すると、料理人を仲介として一つの伝言が伝えられた。それは謎めいた言葉で述べられてはいたが、教区会書記氏が今後マフィンにどれだけ食欲をおぼえるかは、彼女が教区役人職選挙でだれに投票するかという一事で決まるということが、十分明瞭にほのめかされていたのである。これでもう十分であった。もともと流れは変わりつつあったのだが、こうして加えられた衝撃によって、その方向は最終的に決定したのである。バング陣営は、この老婦人が天寿をまとうするまでの期間毎週一シリング分のマフィンを注文することにしたのであった。教区民の非難と賛嘆の声はかまびすしかった。こうしてスブラギンスの運命は定まったのである。

例の双子が同じ柄の服とそれとお揃いのナイトキャップを着せられ、男の子はスブラギンスの右腕に、女の子の方は左腕に抱かれて教会の玄関で陳列されたが、効果はなかった。スブラギンス夫人自身ですら、もはや同情の対象ではありえなかった。投票総数中バングが獲得した得票差は四百二十八票であり、教区民の大義が勝利をおさめたのであった。

### ブローカーの助手

先の選挙の興奮もしずまり、われらが教区は再び比較的平穏な状態を回復したので、我々は、教区民たちの中で、我々の党派抗争や公的生活のすったもんだにほとんど関わることもない人々に、注意を向けることができるようになった。そして、心からなる喜びをもってここに書き留めたいのであるが、この作業のための資料収集にあたっては、他ならぬバング氏から多大のご協力を頂いたのであり、その結果我々はおそらくとうてい返すことができないほどの恩義を被ったのであった。この紳士の半生はきわめて波乱に富んだものであった。彼はさまざまな有為変転を経験してきたのであるが、それは別に、重々しい人物から陽気な人物に変身したというのではない。彼は決して重々しくはないからである。また、闊達な人物から気むずかし屋に変身したというのでもない。彼の性質には気むずかしいところなど毛ほどもないからである。彼の変遷というのは、極度の貧困と中程度の貧困との間の動きであり、彼自身の強い表現を借りて言えば、「食べ物が全然ない状態とろくにない状態との間」を行ったり来たりしたということなのである。彼が力をこめて言っているように、彼は、「真っ裸でおんぼろ舟の片側から飛び込み、反対側から姿を現わしたときには、新調の衣服を身につけ、チョッキのポケットにはスूपの配給券を持っているという、あの好運な連中の一人」ではなかった。また、彼は、不運と貧窮

のために回復し難いほどに氣力を損なわれてしまった連中の一人でもなかった。彼はただ、コルクのように漂いながら、ホッケーの球のように世間によってあちこちに飛ばされる、無頓着で役立たずの、幸福な連中の一人にすぎなかったのである。こちらへ飛ばされ、あちらへ打たれ、ありとあらゆる方向に打ち飛ばされ、右に行ったかと思うと、今度は左、はたまた空中に打ち上げられるかと思えば、次にはどん底へという具合だが、いつも必ず浮き上がってきては、流れのままに暢気に、陽気にはずみつつ進んでゆくのであった。教区役人職の選挙戦に立候補するよう説得される数ヵ月前に、彼は困窮のためにやむを得ずブローカー〔家賃不払いで差し押さえになった家具等を評価・販売する許可を受けている代理執行人〕の下で働くこととなった。その結果、彼が教区の貧しい住民たちの大部分が置かれている状況を確認する機会を得たという点に、大佐は、大衆の支持を取り付ける根拠をまず置いたのであった。その後間もなく、我々はこの男と偶然に知り合うことになったのである。我々は、まず第一に、彼が選挙戦で示した、好感の持てる厚顔無恥ぶりに惹かれたのである。彼とさらに知り合うようになって、彼がなかなかしたたかな観察眼を備えた、抜け目のない利口なやつであることが分かって、我々は驚かなかった。そして、彼と少しばかり話を交わした後で、ある種の人間には、自分たち自身は全く経験していないさまざまな感情に、共感できるのみならず、どうやら理解もできる能力を持ち合わせているらしいということに、少なからず感心したのである（読者諸氏も他の場合にはしばしばそういうことがあったことであろう）。我々が、先ほど言及した仕事を彼が勤めたということについての驚きの気持ちをこの新任の役人に表明していたところ、彼は職業上経験した一、二の逸話をだんだんと語るようになった。あらためて考えてみると、これらの逸話は、我々が潤色することを試みるよりは、彼自身の言葉ほとんどそのまま語られた方がよいのではないかと考えるに至ったので、さっそく次の通り標題を決めることにしよう。

### バング氏の物語

たしかに世間様で言う通りなんでございましてね、とバング氏は話を始めた。ブローカーの助手なんてえのは、人のうらやむ仕事じゃありませんや。それに、この仕事ってのは、言ってみりゃ、貧乏人にとっちゃ死神のお使いみたいなもんですから、だんだん人に嫌われ、ばかにされるようになるもんです。これはあんたさんもおれと同様ご承知のこってしょうが、ただ口に出して言わないだけでござんしょう。だけど、おれに何ができたっていうんですかい。誰か他の人間じゃなくて、おれがやるからといって、この仕事がおそろ悪いものになるってわけでもねえし、おれが一軒の家を差し押さえれば、一日三シリング六ペンスが頂戴できて、他人の動

産を差し押さえることで、おれ自身も家族も少しは難儀しなくてすむようになるわけなんだから、おれがその仕事を引き受けて、やり通したってのも、もっともな話じゃねえですかね。神様もご存知の通り、この仕事は全然好きじゃなかったんでさ。おれはいつも何か他の仕事はないかって探してましたし、それが見つかったとたんに、この仕事にはおさらばしたってわけですよ。そういう問題で代理人をするってこと、つまり代理人の親分じゃなくってですよ、いいですかい、そのことに何か間違ったところがあるっていうなら、この仕事は、とにかくおれみたいな新米にとってみると、それ自体に罰がついてまわるんでございますよ。みんながおれをぶんなぐってくれりゃいいのに、ののしってくれりゃいいのにと何度思ったかしれませんか。そうされたって構いやしませんよ、なにしろそういうことならお手のもんですからね。だけんど、五日の間一部屋に閉じこめられて、読むものといや古い新聞ぐらいしかなく、窓の外を見りゃ、家の裏手の屋根や煙突ばかり、聞こえてくるのは、古いオランダ時計かなんかのチクタクいう音とか、ときどきその家のおかみさんがしくしく泣く声、「あの男」に聞こえないようにとひそひそ声で話している、隣の部屋にいる友達たちの低い話し声とか、子どもがおれを覗き見に来てときどき戸を開けて、それから半分おびえて逃げてゆく足音とか。こういうこと全部が重なって、なんだか自分が卑劣なことをしてるみたいで恥ずかしくなっちゃうんでさ。それから、冬だったりすると、もっと欲しいなって思いたくなるくらいしか火がもらえないし、喉につまって死んじまえてな顔で食べ物を持ってくるんだ。実際のところ、心底そう願っているにちげえねんだ。その家の連中が親切な場合には、夜は部屋に寝床をしつらえてもらえるんだが、そうでなけりゃ親方が一つ送ってよこすんだ。だけど、ずっと顔も洗わず、髭もそらずで、みんなに避けられ、食事時に誰かが来て、もっといるかってことを、「もういらないよね」ってな口調で言いにきたり、でなけりゃ夜になって、おれが夜中まで暗闇の中ですわっていた後になってから、蠟燭がいるんじゃないかって聞きにきたりしないかぎり、誰にも話しかけられもせずにお過ごしすんだ。そんなふうにはっておかれるような時は、おれはすわって考えたもんだ。ただただ果てしなく考え続けた。しまいには洗濯屋の釜の中に蓋をして閉じ込められた小猫みたいに淋しい気持ちになっちゃうんだ。だけど、この仕事をきちんと仕込まれた古手のブローカー助手たちってのは、全然考えなんかしないと思うぜ。じっさい、おれはその連中のだれかが、考えるやり方も知らねえって言うのを、聞いたことがあるんだもんな。

おれはその頃ずいぶんたくさん差し押さえをやったもんだ（とバング氏は続けた）。そうやってるうちに、間もなく、中には他の連中ほど哀れむ必要のないやつってのがいるんだってことが分かってきた。十分な収入があるくせに金欠になっちゃう連中がいて、そいつらは毎日毎日、毎週毎週

そのとりつくろいをしているうちに、そういうことにすっかりなれっこになっちまって、しまいには全然それを苦にしなくなっちゃうんだ。思い出すが、おれが一番まっさきに差し押さえた家ってのは、ここの教区のある紳士の家で、そいつは、その気になりゃいやでも金が入るという人間だと誰もが思っているようなやつだった。おれは、当時おれの親分だったフィクセムと一緒に、午前八時半過ぎにそこに出かけたんだ。勝手口の呼び鈴を鳴らすと、お仕着せを着た召使いが戸を開けた。「旦那はご在宅かい」——「ああ、いるよ」と召使いが答える。「だが丁度今朝食をお取りになっておいでだ」——「いっこうに構わん」とフィクセムが言う。「とにかく、一人の紳士がおいでになって、おりいってお話ししてえことがあるって言うてゐるって伝えてくんな」そこで召使いは、両目を見開いてあちこち見回す。どうやらその紳士なる人物を探しているらしいことがおれには分かった。なにせ、全然目が見えない人間でもないかぎり、フィクセムのことを紳士と間違えるやつなんていやしねえだろうからな。それにおれはどうかといやあ、安いキュウリみてえにみすばらしい風体だった。しかしともかく、召使いは踵をかえすと、居間の方へ向かう。そこは廊下の端にあるこじんまりした快適な部屋だった。そして、フィクセムは（この仕事ではおれたちはいつもそうするんだが）、来客の告げられるのを待ちもしないで、そいつの後からついていき、召使いが「旦那様、お話ししたいことがあるという方が来ておりますが」と言い終わらないうちに、この上なくなれなれしく愛想よい態度でドアからのぞきこむんだ。「一体全体貴様は何者だっ！許しもなく紳士の住居にずかずかと入りこむとはどういう了見だっ！」とこの家の主人は、発作を起こした雄牛みてえに猛然と言うんだ。「お見知りおきくださいませ」とフィクセムは切り出し、人払いをするようにと主人に片目をつむって見せ、手紙みたいにたたんだ差し押さえ許可状を彼の手に押し込む。「手前の名はスミスでございます」と彼は言う。「トンプソン商会の件でジョンソン商会からまいりましたんで」——「ああ、」と相手はたちまちおとなしくなって言うんだ。「トンプソンは元気かね」と彼は言う。「どうぞお掛け下さい、スミスさん。ジョン、出て行ってくれたまえ」召使は出て行った。そして、この紳士とフィクセムはお互いににらみ合い、もうこれ以上はいやというくらいにらめっこしてから、今度はこの楽しみに変化をつけるために、それまでずっとマットの上には立っていたおれの方をにらんだ。「百五十ポンドか、なるほど」とようやくその紳士が言った。「百五十ポンドでございますよ」とフィクセムが言った。「その他に差し押さえ費用、代官ポンド税〔差し押さえ資産にかけられる地方税の一種〕、その他もろもろの諸費用がありますです」——「ううむ」と紳士が言う。「明日の午後でなければ清算はできないだろう」——「それは残念なこつてす。となれば、やむを得ずでございますが、それまでの間、ここにあっしの手下を置いておくことになりますです」とフィク



ブローカーの助手

セムは、このことについてひどくみじめな気持ちであるというふうな顔つきをして言った。「それはたいへん不都合だ」と紳士が言う。「というのは、今夜ここで大きな宴会をやることになっておってな。もしわしの知り合いたちにそこでこの事に感づかれたら、わしはおしまいなのだ。ちょっとこっちに来てくれんかね、スミス君」と彼は、少し間を置いた後で言う。そこでフィクセムは彼といっしょに窓のところに歩いていき、

長々とささやき声で話をし、ソヴリン金貨がちやりと鳴る音が聞

こえたりした後、おれの方を見て、戻って来ると言うんだ。「バング、お前は器用なやつだし、たいへんな正直者だよな。こちらの旦那が、今夜皿洗いをしたり、食卓で給仕する手伝いがお要りなんだそうだ。そこで、お前に特に先約がなければの話だが」とフィクセムのやつは、気遣いみたいににやにや笑い、ソヴリン金貨二枚をおれの手に押し込みながら言うんだ。「お前の手が借りられればたいへんありがたいと仰っておられるんだ」そこでまあ、おれは笑った。その紳士も笑い、おれたちはみんな笑った。そして、おれはフィクセムをそこに残して家に帰り、身ぎれいにしてきた。おれが戻ると、フィクセムは立ち去り、おれは皿を磨き、食卓で給仕をし、そうやって使用人たちをうまくだましたもんだから、だれもおれが差し押さえをしているなんてゆめにも思わなかったんだ。もっとも、結局ほんとにあやういところでばれそうになっちまったんだがね。というのは、残っていた最後の客人たちのうち一人の紳士が、かなり夜遅くまでおれがすわっていた階下の広間に降りてきて、おれの手に半クラウン銀貨を握らせると、こう言うんだ。「おい、お前、馬車を呼んできてくれんかね」おれは、こいつはおれを家から追い出すための策略じゃねえかと思ったんで、むつつりしてそう言ってやろうとしたら、例の紳士が、まるでひどい心配事があるみたいに階段を走り降りてきたんだ(万事に気を配っていたわけさ)。「バン

グ」と彼は怒り心頭に発しているふりをして言った。「はい」とおれは答える。「一体全体お前は どうして食器類の監督をしておらんのだ——「私がこの者に馬車を呼びにやらせようとしていたところなんですよ」ともう一人の紳士が言う。「そして、おれが言おうとしていたのは、」とおれが言う。「他の誰でもいいから使ってくれたまえ」とこの家の主人が口を挟み、おれをどけるために廊下の方へ押しやった。「他のだれでもいいんだが、こいつにはあの食器や貴重品の管理をさせなければならんのでして、たとえどんな理由があっても、この男が家を出ることは許されんです。バング、このろくでなしめが、すぐに居間にあるフォークの数を数えてこい」もちろなおれは、これはだいじょうぶだと分かったんで、げらげら笑いながら去ったわけさ。金は翌日支払われたし、その他におれ自身も心付けを頂戴したんで、これは、それまで手がけたなかでは、おれにとって（フィクセムにとってもそうだったんじゃないかと思うんだが）いちばんいい仕事だったよ。

しかし、これは結局明るい方の面だったんだ、とバング氏は、さっきの逸話を語り聞かせている間示していた、抜け目ない表情とこれみよがしの態度を捨てると、話を再開した。それに残念なことに、暗い方の面と比べりゃ本当にごくごくまれにしか見ることでできない面なんだ。金で買える丁重さってものは、金のない連中にまで及ぶことはまずめったにないからなあ。それに、金欠状態を何とかとりつくろって、また次の金欠の準備をするってことにだってある種の慰めはあるさな、なにせひどく貧乏な人間にはそんなまねはできやしねえんだから。ある時、ジョージ小路にある家に行かされたことがあるんだ。ガス工場の裏手にある例の狭くて汚い路地さ。そして、おれにはあそこの連中の悲惨なありまさとを忘れることなんて、ぜったいできやしねえだろうな、ああ、情けねえ。それは半年分の滞納家賃の差し押さえだった。たぶん二ポンド二シリングだったと思う。その家には二部屋しかなくて、しかも通路もないもんだから、二階の間借り人たちは、出入りのときにはいつもこの家の連中の部屋を通り抜けていたんだ。そして彼らが出たり入ったりする度に、それは平均して一五分に約四回という具合이었다んだが、その連中はこっぴどく罵るんだ。というのは、彼らの持ち物も差し押さえられて目録に入れられちまっているからなんだ。この家の前にはゴミを小さく囲い込んだだけの庭があって、玄関に続く石炭殻を敷き詰めた小道があり、片側にはやぶけた雨水管があった。ひどくゆるんだ紐にかけられた、きたない縞模様のカーテンが窓にかかっていて、内側の棧のところには壊れた鏡の小さな三角形のかけらがのっけられていた。たぶんそれはその連中が使うためのものだったんだろうけど、連中の外見があんまりみすぼらしくみじめなんで、もし自分の顔を鏡でまともに見るという恐ろしい試練を一度は切り抜けたとしても、二度目にやるだけの勇気を奮い起こすなんて、ぜったいできなかったはずなん

だ。いちばん見栄えのよかった頃なら一脚八ペンスから一シリングはしたかもしれない椅子が二、三あって、小さな厚板のテーブルと何も入っていない古い隅の食器棚、それから半分に折り曲げることができて、下の脚が突き出すもんだから、頭をぶつけたり、帽子かけがわりになったりするという種類の簡易寝台があったが、ベッドも布団もなかった。毛布がわりの古い麻袋が暖炉の前においてあり、四、五人の子供たちが床の砂の上ではいまわっていた。強制執行になったのは彼らを家から追い出すための方便でしかなかったんだよ。なにしろ費用の代償として押収できるものなんて何もなかったからな。それでもって、おれはこの場所に三日間留まったんだが、それだって形ばかりのことでしかなかった。なぜなら、あんたもお察しの通り、それにおれたちみんなにも分かりきっていたことだが、どっちみち彼らが金を払うことなんてぜったいできやなかったからさ。暖炉の火が燃えているはずだった場所の傍の椅子の一つに、一人の婆さんがすわっていた。見たこともないくらい醜くて汚らしい婆さんだったが、体を前後にゆらゆらゆらゆらと何度も何度も動かして、いっこうにやめようとしない。ただ、ときどき老いさらばえた両手をもみしだくだけなんだが、その時以外は、その両手を膝の上でこすり合わせ、椅子の動きに合わせて指をびくびくと上げ下げしているんだ。反対側には母親が両腕に赤ん坊を抱えてすわっていた。その赤ん坊は泣き疲れて眠るまで泣き続け、目が醒めるとまた泣き疲れるまで泣くことを繰り返していた。その婆さんの声は一度も聞いたことがなかった。すっかり腑抜けになっちまっている様子だったが、母親の方はどうかといえば、そっちも同じ状態だったらまだしもましだったろうな。なにしろ、その女は、悲惨な生活のあまり悪魔に変わっちまっていたんだよ。その女が床をころげまわっている裸の小さな子供たちを罵る声を聞いたり、腹がへって泣いた赤ん坊をこっぴどくぶんなぐるのを目にしたら、あんただっておれとおんなじくらい震えただろうさ。そこで彼らはずうっと留まっていた。子供たちは一度か二度少しばかりのパンを食べ、おれはかかあが運んでくれる弁当のいちばんいいところをそいつらにくれてやったんだが、女の方は何も食べなかった。彼らは寝台にも一度も寝ようとしなかったし、その間中ずっと部屋の掃除もぜんぜんされなかった。近所の連中もみんな自分たち自身があんまり貧乏過ぎるものだから、彼らのことなど全く気に留めていなかったが、二階に住んでいる女が罵るのを聞いて分かったんだが、どうやら夫の方は数週間前に流刑になっちまったらしかった。強制執行の猶予期間が満了になってみると、家主もフィクセムのやつもこの家族を見てすっかりぞっとしてしまった。そこで連中は騒ぎ回って、彼らを救貧院に入れさせたんだ。連中はあの婆さんのために病人用の寝椅子を送ってよこし、シモンズが夜に子供たちを連れ去ったんだ。婆さんは診療所入院して、すぐに死にしまった。子供たちは今でも全員救貧院にいて、前と比べりゃけっこう快適に暮らし



ているよ。母親についてだが、こいつを飼い慣らすことはてんで不可能だった。彼女は物静かでよく働く女だったんじゃないかと思うが、悲惨な生活のおかげで本当に癡狂になっちまったんだ。そんなわけで、救貧委員にインク壺を投げつけたり、教区委員に悪態をついたり、近くに寄る者はだれかれなしにぶんなぐったりして、五回も六回も矯正院送りになったあげく、ある朝血管が破けて、これまた死にしまった。それは彼女自身にとっても、男や女の年老いた貧民たちにとってもありがたい救いだった。何しろ彼女は、まるでこの貧民連中がスキトルズ〔ボウリングの一種〕のピンで自分がボールだとでも言わんばかりに、あっちこっちにあたり散らしていたもんだからね。

さて、これもまあ相当ひどいもんだったが、とバング氏は、もうほとんど話は終わったとでも言うかのように、ドアの方に半歩踏み出して言った。これもひどい話ではあったんだが、おれが差し押さえにいったある家のご婦人の場合なんかは、なんて言うかこう、言ってみりゃ静かな悲惨さみてえなものがあってな、こっちの方がはるかにおれにはこたえたよ。そこが正確にどこかってことはどうでもいいことだ。実際、話さない方がいいと思うしな。とにかく、おんなじような仕事だった。いつものようにフィクセムと一緒におれは出かけた。一年分の家賃が滞納になっていたんだ。ひどく小さな女中が戸を開けて、おれたちが中に招き入れられてみると、居間には三、四人の可愛い小さな子供たちがいた。その居間はすごく清潔だったが、家具が殆どなくて、子供たちもござっぱりはしていたが、ろくな服は着ていなかった。「なあ、バング」と、おれたちがちょっとの間二人きりになると、フィクセムが低い声でおれに言った。「おれはここの一家の事情をちっと知ってるんだが、おれの考えじゃ、もうおしまいってとこだぜ」「この連中は支払いができないって思うのかい」と、おれはひどく心配そうに聞いた。実は、おれはあの子供たちの顔つきがすっかり気に入っていたんだ。フィクセムは頭を振って、答えようとしたんだが、丁度その時ドアが開いて、これまで見たこともないくらい真っ白な顔をして、目のところだけ赤く泣きはらしたご婦人が入ってきた。彼女は誰にも負けないくらいしっかりした足取りで入ってくると、注意深く後ろの戸を閉め、石でできているみたいに落着き払った表情で腰をおろした。「おふた方、何事でございますか？」と、彼女はびっくりするほど落ち着いた声で言うんだ。「これは強制執行なのでございますか？」「さようなんです、奥さん」とフィクセムが言う。そのご婦人はいっそうしっかりと彼を見つめた。どうも彼の言ったことが分からなかったらしい。「さようなんです、奥さん」とフィクセムがまた言う。「これがわたしどもの差し押さえ許可状でございます、奥さん」と彼は言い、次の紳士の後で読むことを予約しておいた新聞みたいに〔当時のレストランなどでは備え付けの新聞を客が順番に

回し読みしていた] 丁重にそれを手渡した。

そのご婦人は唇をふるえさせながらその印刷された紙を受け取った。彼女はそれに目をおとし、フィクセムはその書式の説明を始めたんだが、かわいそうに、彼女がそれを読んでいないことが、おれにははっきりと分かった。「ああ、なんということでしょう」と言って、彼女は突然わっと泣きだし、その許可状をおっことして、両手で顔をおおった。「ああ、神様、私たちはどうなるのでしょうか」彼女の泣き声を聞きつけて、十九か二十の若いご婦人が入ってきた。どうやらドアの外で聞き耳を立てていたらしく、両手に小さな男の子を抱きかかえていた。彼女がその子をご婦人の膝の上に黙って降ろすと、ご婦人はそのかわいそうな子供を胸に抱きしめて、そのまま泣き続けた。しまいには、フィクセムのやつまで、自分の汚い顔の両側に流れ落ちてきた二つの涙のしずくを隠すために青い眼鏡をかけたくらいだった。「さあ、お母様」と若いご婦人が言う。「あなたがこれまでどれほどのことを堪え忍んできたかご自分でお分かりでしょう。私たちみんなのために、お父様のためにも」と彼女は言う。「どうかこんなことには負けないで下さい」「ええ、ええ、負けませんとも」とご婦人は言い、急いで気を取り直し、涙をぬぐった。「私はほんとに愚かでした。でも、もうよくなりました、ずっとよくなりましたよ」そして、それからご婦人は立ち上がると、おれたちと一緒に各部屋を回った。おれたちが目録を作っている間、自分から引出しを全部開けてみせたり、子供たちの小さな服をより分けたりして、仕事がしやすいようにしてくれたんだ。そして、あらゆることを奇妙に急いでやったということを別にすれば、まるで何事もなかったかのように冷静で落ち着いていた。おれたちがもう一度階下に降りたときに、彼女はほんの少しためらい、それからとうとうこう言った。「おふた方、」と彼女は言う。「申し訳ないのですが、私は悪いことをしてしまったようで、おふたりに迷惑がかかることになるかもしれません。私はたった今こっそり隠してしまったのです」と彼女は言う。「これなのですけれど、この世で私に残されたただ一つの装飾品なのです」そう言って彼女は金の台座にはめ込まれた小さな細密画をテーブルの上に置いた。「実はこれは、」と彼女は言う。「私の亡くなった父の細密画なのです。父が死んだことを神に感謝する日がこようとは、昔はゆめにも思わないことだったのですが、今は感謝しておりますし、もう何年も前から、本当に心から感謝しているのです。どうかこれも持って行って下さい」と彼女は言う。「それは病気のときも不幸のときも、決して私から目をそらしたことのない人の顔です。そして、神様もご存じの通り、私がその両方のために尋常でない苦しみを受けている今、それに背を向けることはとてもできないくらいなのです」おれは何も言うことができなかったが、書き込んでいた目録から目を上げてフィクセムの方を見た。フィクセムのやつが意味ありげにおれの方に向なわずいてみせたんで、おれはたった今書きかけた

「細密…」という文字をペンで線を引いて消してしまい、その細密画はテーブルの上に置いたままにしていっていった。

さて、手短に話すすると、おれは差し押さえ資産監視人として置かれ、そのままとどまった。そして、おれなんかは無知な男だし、この家の主人の方ときたら頭のいい人間だったわけだが、おれはそいつが決して見るができなかったもの、見るのに間に合うのなら今でもどんな犠牲でも払う（そいつに払えるものがあればの話だがね）だろうものを見たんだ。つまり、おれはそいつの奥さんが、心労に苦しみながら少しもこぼすこともなく、悲しみをだれにも話すこともなく、しだいに衰弱してゆくのが見たんだ。おれは、彼女がやつの目の前で死にかけているのを見たんだ。おれにはやつがちょっとだけでも努力すりゃ彼女を救えることが分かっていたんだが、やつは一度も努力なんてしようとしなかった。おれは別にやつを責めたりはしないよ。あいつは氣力を奮い起こすなんてとてもできやしなかったと思うからな。奥さんの方がやつの要求は全部前もって処理していたし、やつの代役をやってくれていたから、一人になっちまったらその男はもうどうしようもなかったんだ。おれは、奥さんが、彼女だからこそみすばらしくても何とか着こなしてはいるが、彼女以外の人間が着ていたらとてもまともには見えないような服を着ている姿を見ると、よく考えたもんだ。もしおれが紳士だったとして、昔求愛した頃には粹で快活な娘だった女が、おれを愛してしまったおかげでこんな姿になっちまったのを見たら、心臓をかきむしられる思いがしただろうなって。その頃はまだ、ひどく寒くて湿っぽい季節だった。ところが、彼女の衣服は薄いうえに、靴なんか最上にはほど遠いしろものだったのに、その三日の間ずっと朝から晩まで、彼女は外出して金策に走り回っていたんだ。金の工面がなんとかついて、強制執行は清算された。その金が届いたとき、家族全員がおれのいる部屋に集まってきた。父親の方は、不自由がなくなったので、しごく上機嫌だった。もっとも、どうして金が入ったのか分からなかったんだろうがね。子供たちも再び楽しそうで、元気になった。一番上の娘が、差し押さえがあってから初めての快適な食事の準備に立ち働いていた。そして、母親はみんなのそういう有様を見て嬉しそうだった。しかし、おれが女の顔に死相を見たことがあるとすれば、その晩彼女の顔にはまさにそれが表れていたんだよ。

おれの予感はあたっていた、とバング氏は上着の袖で急いで顔をこすりながら言った。その一家はもっと豊かになり、好運が訪れたんだ。しかし、遅すぎた。あの子供たちにはもう母親はいない。そして、父親の方は、あれ以来自分が手にいれたすべてのもの、家屋敷も財産も金も、自分が今持っているものすべて、持ち得るものすべてを、失った妻を取り戻せるものなら、投げ出したいと思っているんだ。